2021 年度　森泰吉郎記念研究振興基金　研究成果報告書

鶴岡市における農業臨時労働力確保に向けた方策の探求

政策・メディア研究科　修士２年
重森　圭太

1. 研究の概要および進捗

研究背景と目的

- 令和元年度における1農業経営体あたりの全国平均所得は約194万円であり、所得向上には果菜類などの高単価の栽培が必要となる
- 果菜類は季節性の作業を要する作物が多く、農繁期における短期的な労働力不足が近年顕在化している
- こうした農繁期における短期的な労働力不足に対し、年間の作業量が平準化していないという農業労働の特性から、農業臨時労働力に頼らざるを得ないのが現状である
- 農業臨時労働者への報酬水準は他産業と比較して低い傾向にあり、金銭的インセンティブで雇用を確保するのが困難

↓

- 鶴岡市のだだちゃ豆農家における農業臨時労働力の現状や取り組みに関して明らかにする
- 農業臨時労働に対しての動機付け要因・衛生要因、その中でも非金銭的インセンティブを明らかにすることで、農業臨時労働力を確保するための方策を明らかにする

（例）

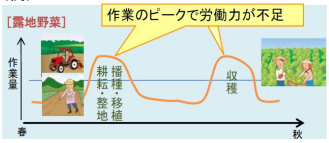

図１．露地野菜における年間作業量イメージ

先行研究

- 今野（2014）は、地域の労働力を組織的に利用し調整する地域調整システムの実態を北海道のきゅうり農家などを事例に検討し、バッファ機能を持った外部組織との連携による需給調整の重要性を指摘している
- 曲木（2019）は、愛媛県西宇和郡のみかん収穫のシーズンアルバイター事業の実態把握および分析を行っている。アンケートにおいて収入以外にも農業体験や交流を目的として参加しているアルバイターがいることや、交流を目的としている参加者は、次年度の参加意向が高いとの結果が出ている
- 澤田（2018）は、農業法人の女性従業員に着目し、長期キャリアパスの提示、女性従業員を配置した相談体制、希望の作物への従事などの動機付け方策を明らかにしている
- アメリカの臨床心理学者、フレデリック・ハーズバーグは仕事における満足度は、ある特定の要因が満たされると満足度が上がり、不足すると満足度が下がるということではなくて、「満足」に関わる要因（動機付け要因）と「不満足」に関わる要因（衛生要因）は別のものであるとする考え方

研究対象

対象地域
山形県鶴岡市は人口約12万人、東北4位の農業産出額を誇る農業が盛んな地域。孟宗、だだちゃ豆、温海かぶ、庄内柿といった在来野菜が豊富で、日本で初めてユネスコ食文化創造都市に認定されている。鶴岡市にとって農業は基幹産業であり、食文化を支える重要な役割を果たしている。

対象作物
鶴岡市の在来野菜であるだだちゃ豆は、その独特な風味と味わいから「枝豆の王様」とも称され、高単価で取引されている。収穫期以外は家族のみで栽培しているが、収穫時期の7月下旬～9月上旬の1ヶ月半で、1日約10人ほどの農業臨時労働力が必要となる。これは、品種改良がされておらず、はじき（不良品）が多く、選別の労働力が多く必要となる等、機械化できない作業が多くあることが要因である。収穫期の労働力不足は、だだちゃ豆農家における最大の経営課題の一つと言える。

研究手法

混合研究法

現状確認 → 仮説創出＆検証 → 提言 → 介入実験 →

現状確認	仮説創出＆検証		提言	介入実験
質的調査	質的調査	量的調査		
①農家（雇い手側）への半構造化インタビュー	②農業臨時労働者（働き手側）への半構造化インタビュー	③農業臨時労働者（働き手側）への質問紙調査	④農業臨時労働のインセンティブの探索、労働力確保方策の探索	⑤募集時における介入実験
・鶴岡市のだだちゃ豆農家へ半構造化インタビューを実施し、農業臨時労働力に関する現状及び定着に対する工夫を把握する	・だだちゃ豆農家にて農業臨時労働している人材にインタビューを行い、動機付け要因・衛生要因候補を探索する	・インタビューから得られた要因をもとに農業臨時労働者および候補者にアンケートを実施する	・アンケート結果から、農業に対する非金銭的インセンティブを重回帰分析し同定する。そのインセンティブを促進する方策の検討を行う	・④にて提言する施策の効果検証を行うために、だだちゃ豆の臨時労働力の募集に介入実験を行う

現在の進捗

- 先行研究調査（農業臨時労働力確保の方策、農業分野における動機付け研究）
- だだちゃ豆農家11名※への半構造化インタビューを実施

↓

農家が農業臨時労働者の募集や定着を行なっている工夫をまとめると以下が判明した。

①メンバー間のコミュニケーション活性
　・収穫祭、飲み会、食事会の実施
　・朝食休憩やおやつ休憩を取って、皆でご飯を食べる
②はじき（商品にならないだだちゃ豆）を毎日渡している
③学生へのサポート
　・就職活動のサポート（バイトOBとの連携）
　・卒業論文のフィールドを提供している

動機付け要因

④労働力として扱わない
　・教える時も優しく丁寧に教えている
　・労働力として扱うのではなく、かなり気を使っている
⑤労働環境の改善
　・家の綺麗なトイレを使えるようにしている、エアコンを設置している
　・労災保険に加入し、機械のマニュアルを作成し安全面に配慮している
　・高齢者が無理なく働ける作業量・時間にしている

衛生要因の改善

※鶴岡市においてだだちゃ豆栽培が盛んな寺田・白山地区のだだちゃ豆農家（専業農家）を中心にスノーボールサンプリングを行った

	性別	年齢	地区	栽培規模（ha）	時給	労働力不足を感じたか(5件法)
A	男	34	寺田	3.1	800・850	ややそう思う
B	男	41	白山	2.2	1500・1200・850	そう思わない
C	男	40	白山	3.4	―	あまりそう思わない
D	男	46	白山	3.3	1500・1200・900	そう思わない
E	男	38	その他	2.5	1000・850	ややそう思う
F	男	46	その他	4.5	1050・850	あまりそう思わない
G	男	46	寺田	12	950・850	そう思う
H	男	69	寺田	2.1	900・800	そう思う
I	男	55	寺田	4	900・800	そう思う
J	女	44	その他	0.9	1000	そう思わない
K	男	38	その他	3	1000・800	そう思わない

図２．だだちゃ豆農家へのインタビュー結果

本研究の意義と今後の研究計画

本研究の意義
- 農業における担い手などの課題に関して注目されることが多いが、農業臨時労働力などの短期的な労働力に関する研究は少なく、新規性があると考える
- 農繁期における臨時労働力不足という課題は、鶴岡市に限らず全国の他の地域でも同じ課題を抱えおり、取り組むべき課題である
- 農繁期は主に収穫期と重なることが多く、労働力不足を解消することで、収穫量の維持・拡大を実現し、農家の待遇改善や長期的な雇用の確保にも繋がると考える

今後の研究計画
②農業臨時労働者への半構造化インタビューを2～3月、③農業臨時労働者へのアンケートを3～4月、④アンケート結果の分析・提言を4～5月、⑤介入実験を6月に実施する予定である

2. 謝辞

この度は、森泰吉郎記念研究振興基金に採択を頂きありがとうございました。頂戴した研究費により研究に使用するノート PC を購入し、論文の執筆やインタビュー内容の分析等に活用いたしました。改めて、御礼申し上げます。